特集

私らしく働くために

いま、社会で自分の能力を発揮し、働く女性が増えています。でも、結婚、出産後も働き続けるとなると、まだまだ二の足を踏む女性も多いのです。しかしながら、仕事を辞めた女性たちは「いつかまた働きたい」と再就職の道を模索しています。どうしたら「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業意識にとらわれることなく、自分らしい働き方ができるのか、働く女性の現状について探ってみました。

働く女性は今

収入がほしい、自己実現したい、あるいはお金より社会的貢献がしたい……。働く目的は人それぞれです。しかし、それと同時に私たちが働きたいと望むのは、社会のなかで自分の働きぶりが評価される喜び、自分を高めてくれる人に出会える喜びがあるからです。ところが、学校を卒業後、こうした意欲をもって就職しても、多くの女性たちは結婚や出産・子育てを理由に退職し、子育てが一段落してから再就職するという働き方をしています。

たしかに、家事・育児の負担が女性一人の肩にかかっている限り、家庭生活と仕事を両立させて働くことは大変なことです。けれども、一旦、終身雇用のレールから降りてしまうと、中途採用の枠は極めて狭く、就職の条件は厳しくなってしまいます。こうした現状と家庭生活との両立を考え、再就職する女性の多くはパートタイムという働き方をしています。パートタイムは、勤務時間が短く、自分の都合のよい時間に働ける反面、賃金は低く、身分が保障されていないなど、正社員に比べ労働条件が悪くなります。また補助的な仕事しかなかったり、仮に正社員と同じ仕事をしてもなかなか正当に評価してもらえず、女性の働く意欲の喪失につながっています。また一度社会と隔たりができてしまうと、いまの自分に自信が持てず、その一歩を踏み出せない人も多いようです。

働くことを見つめ直すとき

しかし、21世紀を迎え、社会は大きく動いています。バブルの崩壊と共に、男性主導の経済神話も崩れ、男女が共に働き、共に家事・育児を行う「男女共同参画」へと進んでいるのです。そして、社会の責任として男女が共同して働くことができるよう、育児・介護休業法や男女雇用機会均等法など女性が働きやすい条件が整いつつあります。そう、いま働きたい女性に追い風が吹いているのです。いま一度、私はどんな働き方がしたいのか、働くとはどんな意味や価値を持つものか、見つめ直してみませんか。そして、男性のみなさんも家庭・職場・地域とのバランスのとれた生き方に目を向けていきませんか。

市民インタビュー

歩み続ければ夢は実現するもの。私らしく生きるために働いています

一級建築士◆鳥塚美智子さん

【私の職歴】

〈30代〉子育てが一段落したのを機に、システムキッチンの販売会社でパートで働き始める。その後、工務店に正社員として就職。35歳で2級建築士の資格を取得。転職を経て36歳で知人と設計事務所を開設。〈40代〉40歳で1級建築士の資格を取得。現在は住宅や店舗の設計に携わっている。

経験も資格もなかった主婦がここまでやってこられたのは、何もかも初めてのことばかりだったからだと思います。大学卒業と同時に結婚し、社会経験のないまま家庭に入った私にとって、働くことはまさにキャリアゼロからのスタートでした。ほんと、はじめはパソコンはもちろん、電卓一つまともにたたけなかったんですから。むしろ何もできなかったからこそ、謙虚にいろいろなことを吸収できたのかもしれません。

結婚当時、私の夫は「女は家庭に入るもの」という考えの人でしたし、私もまた「そんなものかしら」と漠然と思っていました。そんな私がなぜ働きたいと思ったかと言えば、可能性を試してみたかったからです。そして何よりも、「私」を生きてみたかったからです。この思いはパートから正社員に、そして建築士へと少しずつ夢が実現していくなかで実感できたものです。はじめは批判的だった夫も、家庭との両立に四苦八苦しながらも働き続けている姿をみて、協力してくれるようになりました。働くことによって、家族が一つになれたと思います。そして多くの人との出会いは、やはり家庭のなかだけでは得られない貴重な経験です。働くことで私自身がつくられていった、いまはそんな気持ちでいっぱいです。

女性の再就職について
原田静枝先生にお聞きしました

【再就職アドバイザー】
原田静枝

プロフィール　原田ワーキングライフ研究所代表。大学卒業後、業界紙記者などを務める。子育て後、再び女性誌編集部に入り、以来、自らの経験をもとに、既婚女性の再就職を追い続ける。主な著書に、『女性の再就職』（毎日新聞社）『30歳からの出産』（徳間書店）などがある

いま少子・高齢化の進展で、労働力人口が減っています。４人に１人が高齢者となる2014年には、およそ500万人の労働力が不足すると言われています。高度経済成長期、貴重な労働力として迎えられた中学生の“金の卵”とまではいかなくとも、いま専業主婦に“いぶし銀の卵”くらい大事な労働力として期待がかかっているのです。

それなのに、再就職のハードルを自ら高くしているのが、「かつてのキャリアを活かし、生きがいのある仕事がしたい」という女性たちの意識です。でもそういう女性たちのキャリアはせいぜい７～８年。しかもそれは、卒業した後、就職した会社でたまたま割り当てられた仕事でしょう。果たしてそれを再就職で生かせるのか、あるいは適職と呼べるかどうかは疑問です。

また、いま社会は男女共同参画という方向に進んでいます。1993年に制定されたパートタイム労働法の改正などが検討されているほか、税法や年金などの社会保障も「家族単位」から「個人単位」へと見直されつつあります。もう専業主婦ではいられない社会になることは必至です。こうした社会の変化も視野に入れて、働くことを考えていかなければならないのです。

あなたが再就職を目指すなら、職業に優劣はありません。あるのは向き不向きだけです。かつての職業やプライドに固執しているより、どんな仕事、どんな形でもいいから、まず最初の一歩を踏み出してみることです。そしてその仕事が向いていないと思ったらほかの仕事を探す。転職自由が再就職の強みです。そうやって軌道修正しながら果敢に挑戦していけば、必ずあなたらしい働き方が見つかります。女性の再就職とかかわって20年余り。私の助言を受けいれてくれた多くの女性たちは、今もエネルギッシュに働いています。さあ、あなたもその仲間入りをしませんか。

再就職の切符を手にするための３か条

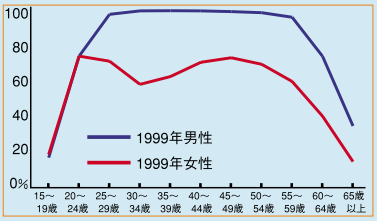
【１】まず一区間の切符を買おう　家族を背負っているなら、いきなり遠距離旅は無理。再就職を列車にたとえるなら、まず、気軽に乗れる「一区間の切符」を買うつもりで、一日３～４時間、週３日くらいの働き方から始めよう。

【２】資格の学習は働きながら取る　まずは働くきっかけをつくることが大事。資格の取得は、仕事の向き不向きを見極めてからでも間に合う。

【３】途中下車しない　この再就職列車は、降りることより再び乗り込むことのほうが大変。継続は力なり。少々のことで挫折せず働き続けよう。

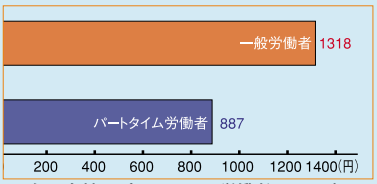
データにみる女性の就労

データ① M字型を描く女性の労働力率



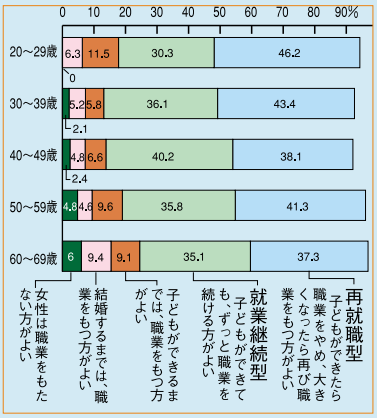
働き続ける男性と違い、女性の働き方は、卒業と同時に就職、結婚・出産で退職後、子育てが一段落した頃再び就職するという形をとるため、M字型のカーブを描く。【総務省「労働力調査」より】

データ② 女性パート労働者と一般労働者の賃金格差



99年の女性のパートタイム労働者は、１時間あたりの所定内給与額は887円。一般労働者の1318円と比較すると、約67%にとどまっている。　【厚生労働省「賃金構造基本統計調査」より】

データ③ 年齢別・女性の働き方の意識



特に30代から40代までの女性で、再就職型より就業継続型が増加傾向にある。子育てなどで仕事を辞めた女性が再就職の厳しさを実感したり、あるいは家庭との両立に奮闘しながらも、実際に仕事を継続している女性が、職業継続のメリットを実感している現れと考えられる。

【内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査」（平成12年）より】

大切なのはいくつになっても社会とつながりをもつことです

ファミリー・サポート・センター提供会員
◆稲垣三三子さん

【私の職歴】
〈20代〉１年間事務職を務め、結婚退職。〈30代〉子育てに励む。〈40代〉45歳で銀行の渉外としてパートで働き始める。〈50代〉55歳で銀行を定年退職後、さまざまな地域活動に参加。２年前から市のファミリー・サポート・センターの提供会員として活動中。

いま、市のファミリー・サポート・センターの「仕事と育児の両立支援」をお手伝いする提供会員として、お子さんを自宅でお預かりする仕事をさせていただいています。私の若い頃と違い、いまは女性も社会に出て働く時代です。でも出産や子育ての問題などを考えると、女性が働き続けるって大変なことですよね。「女性は子育てがあるから仕事ができない」などと言われて辞めざるを得ないようでは社会は変わらない。将来有望なお母さんたちに働き続けていただきたくて、この仕事をはじめました。

実は私も、家庭の事情が許すなら、いつかもう一度社会に出て働きたいと思いながら長年くすぶり続けていました。私の場合、就職１年目で結婚退職。45歳で思いきって再就職にチャレンジし、銀行の渉外の仕事にパートとして採用され、55歳の定年まで勤めました。全くの素人でしたから緊張の連続でしたけど、とても新鮮で充実した毎日を送ることができましたし、社会から評価される喜びも知ることができました。人間はいくつになっても人とかかわり、いきいきと生きていたいもの。私のような年代にとって働くということは、いままで積み重ねてきた経験を少しでも活かし、社会とつながりをもっていくことだと思います。